



銀座通りに残るレトロなビル

気がつけば 函館市民に なつていた。

Vol.2



空洞化してほしくない 函館の魅力

市電が走るというだけで

旅行で函館に来ていたときは、ひたすら市電に乗り町を探検していました。市電など函館市民には当たり前かもせんが、関西には、市が経営する「市電」は、もはや一本もありません。関西人の私は、今も市電が維持されているというだけで、「この町はちょっと違う。何かあるはず」と期待を大きくしていました。

十字街の電停近くに銀座通りがありました。かつて北日本最大のカフエ

街であり、今もその名残であるレトロなビルが並んでいました。一部は事務所や店舗に再利用され、一部は扉を閉ざしたままと、それぞれがありのままで時を経てきたような感じがしました。

観光による町興しに期待が高まり過ぎるためか、歴史的な町並みの中には、必要以上に修景され、映画のセットのようになってしまった所もありますが、銀座通りは、観光客に媚びを売るような雰囲気とは無縁のように思えました。

通りには12月でもないのにサンタを派手に飾り付けた店がありました。地元生まれのハンバーガー店で、このチエーンがあるおかげで、「世界の言葉」の某店も函館には進出できないところでした。地元資本が全国資本や海外資本に駆逐されそうな今の時代に、何と痛快な話でしょ。函館には地元生まれの「ハンバー」がありました。

驚くべき都市機能

「中央病院前」という電停がありました。地方の病院不足が叫ばれる時代ですから、その名前を聞いたとき、「大きな病院はここだけかもしねない」と思いましたが、誤解もいとひどく、函館には立派な病院がたくさんあり、

地域単独の医療情報誌まで刊行されていました。

高等教育機関も少なくないことを知りました。国立大学2校に私学が1校、周辺の自治体と共同で設立した公立大学や、ロシアの国立大学の分校もありました。

図書館も百万都市の京都市の中央図書館より大規模で情報設備が整っていることに驚きましたし、函館博物館、北洋資料館、北方民族資料館、道立美術館など文化施設の充実ぶりに目を見張りました。

日本に公園という概念すらなかつた明治時代に造られた函館公園がありました。園内には動物施設や遊園地もありました。市内に温泉が2カ所もあり、温泉熱を利用して熱帯植物園もありました。メディアにしても、CNN/TIME局があれば新聞社もありました。

公共施設も函館の魅力

函館の人口は28万人弱ですが、このくらいの人口規模で、ここまで都市機能の整った町も珍しいのではないでしょうか。首都圏や関西圏には人口30万、40万規模の都市も少なくありませんが、多くは寝に帰るためのベッドタウンです。都市機能の多くは核となる大都市に依存しています。

私見ですが、明治維新以降、日本全国が比較的バランスよく発展したのは、江戸時代から各藩が独立国として、すべての物事を基本的に藩内で完結させてきたことが大きいのではないかと思います。

どの藩にも農業、工業、商業など必要な産業機能や経済機能は一通り整い、人材にしても、儒学者もいれば農学者もいて技術者もいる。文人もいれば絵師もいて、芸能ほか諸芸の匠も存在しました。

その蓄積があればこそ、各地方が競うように近代化の道を邁進してきたのですが、いつの間にか大都市圏への集中が進み、国際化がそれに拍車をかけ、地方が目前で担ってきた諸機能も弱体化する一方です。それでなおさら地方が中央や海外に依存せざるを得ないといふ悪循環が強くなります。そういうことを考えますと、函館の充実した都市機能は、心強くも誇るべきものではないでしょうか。行政の負担もたいくんでしょうが、どれもが末長く維持されることを望みたいものです。

★プロフィール★
おおにし つよし 剛さん
大阪出身。
2011年秋より、函館に移住。
「新はこだてライブラリ」を設立し、函館発の電子書籍・印刷書籍の出版に取り組む。
2012年には、2008年秋からの函館通いで感じた町の魅力を綴った「新函館写真紀行」を出版。
現在は、移住サポーターとしても活躍している。